

ポポフ ニュース

2000年5月号

No.

6



Pole pole Foundation



活動報告

日本での活動

1999年

6月8日-20日

「コンゴのアートとポポフ展」 堺町画廊（京都）

11月17日

サガ・シンポジウム

「カフジ・ビエガ国立公園におけるゴリラの虐殺と保護の現状」 山極寿一

国際観光センター（犬山市）

12月2日-3日

特別講義「コンゴの自然保護の現状と課題」

バサボセ・カニューニ&ピチブ・ムフンブーカ

山口県立大学（山口市）

12月21日-26日

「ピチブ・ムフンブーカ展」 堺町画廊（京都）

12月25日

「コンゴの音楽と味を楽しもう」 堺町画廊（京都）

12月26日

「コンゴの昔話を聞く」 堺町画廊（京都）

2000年

3月18日-20日

「動物工作展&ゴリラは今」 早川 篤

フリースペース美手蝶（岸和田市）

3月31日-4月1日

イエール大学国際シンポジウム「戦争と熱帯雨林」

ゴリラの現状報告と保護対策会議（山極寿一）

イエール大学（米国）

ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Polepole Foundation)の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくったり、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、東ローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付金を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。日本ではまだポポフの会員を募集するまでには至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュース・レターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフグッズや絵はがきの販売についても紹介いたしますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。



ピチブ・ムフンブーカ画

生き残ったゴリラと私たち

ジョン・カヘークワ

昨年ゴリラたちが大量に殺され、生息数が3分の1に減ってしまったことはポポフニュース5号(1999年12月)でお聞きのことと思います。幸いなことに、昨年9月にそれまでゴリラやゾウの密猟をしていた人々を公園が雇いあげてから、公園内での野生動物の密猟や不法な伐採は目立って減りました。今年の1月末に京都大学の調査隊によって継続調査されているガニヤムルメ集団のメス3頭が殺される事件がありましたが、他にゴリラが殺されたという報告はありません。

これまで観光客が訪れていた4つのゴリラ集団はすべて消滅してしまいましたが、ムシャムカ集団で生まれたカボコというオスが7頭の小组を率いています。このオスは今年13歳になり、背中も白銀色に染まって立派な風格を漂わせはじめています。私たちはこのオスにムガルカという名(この地域の村長の名)を付けて、毎日訪問するようになりました。もう一つは32頭のゴリラからなる大集団で、ミシェベレ(初代のトラッカーの名前)と名付けられた大きなシルバーバックに率いられています。以前ニンジャ集団にいた3頭のメスが加わっており、昨年の9月と今年の2月には新しく赤ん坊が生まれたことが確認されています。この2集団のゴリラたちを新しいエコ・ツーリズムの対象として、私たちは公園の運営を再開することになりました。2集団には朝から晩まで監視がついて密猟を防止しています。最近ではゴリラたちが人間への警戒心を解いて、平和な姿を私たちにを見せてくれるようになりました。

昨年から今年にかけて、私たちは内戦で壊れた住居や畑を修復するのに大わらわでした。1998年の8月に新たな内戦が勃発して以来、数万の兵士と暴徒と化した群集が公園周辺の村や畑を踏みしだき、一斉に西方のジャングルへと逃げ込んでいったのです。公園の詰め所もたたき壊され、家具は持ち去られ壁ははがされて、またたくうちに土台と骨組みだけになってしまいました。村へもどれず何ヶ月もジャングルで飢えに苦しみ、マラリアにかかって命を落とした者もいます。ポポフの事務所もすっかりもぬけの殻となりました。

私たちはまず、日本からの資金を使って事務所を建て直し、中古のタイプライターとオートバイを購入しました。ポポフが活動していることを人々にわかってもらうには、迅速な広報活動が不可欠と思ったからです。活動の主体はポポフ・グッズの製作、苗木センター、自然保護教育の3つです。今は亡きゴリラたちの面影をしのび、ゴリラたちのさまざまなポーズを木に彫りつけています。みんながアイデアを持ち寄り、牛の角を利用して新しいペンダントを作ったり、ポポフの新しいグッズを考案したりしています。ポポフの看板もあちこちに立てられ、多くの人々にポポフ



の考え方が理解されるようになりました。2年半前に近隣の村々に配られた苗木はすくすくと育ち、もう私たちの背の丈を越えました。これらの苗木はポポフの希望です。ポポフの苗木があちこちで立派に育てば、ポポフの支持者も増えていくのです。苗木センターは健在で、次の苗木が配られる日を待っています。緑の資源は着実に増えていくことを期待できるでしょう。

現在、子どもたちの教育環境は最悪です。公務員はもう2年以上も給料をもらえず、学校の先生は次々に転職していきました。そこで親たちはお金を出し合って先生の給料を負担し、学校教育を何とか維持しています。黒板もチョークもなく、まして教科書などのぞむべくもありません。先生たちはこれまでの教育経験から工夫をこらして最適な授業を試みています。ポポフは10歳以下の子どもたちを対象に自然保護教室を開くことにしました。自然教育では黒板も教科書も要りません。身の回りのすべての物が教材になります。伝統的な素材で作った家や家具、畑の作物、雑草、料理などさまざまな素材を用いて自然の仕組みを、人間の適切な自然への関わり方を教えます。ポポフの看板の元に子どもたちが集い、数人のスタッフで定期的に教育講座を開いています。

今年に入って、カフジのゴリラが激減したというニュースが世界中に知れわたり、さまざまな国からゴリラ保護のために援助が寄せられるようになりました。ユネスコが世界遺産修復のための資金供与を約束し、Nouvelle Approach, Ape Alliance, Lukuru Projectなどの国際的なNGOが車、無線機、パソコン、パトロールのための装備などを運んでくれました。おかげで公園の設備も元通りに回復しようとしています。しかし、こういった援助はもっぱら国立公園の運営に向けられていて、地元の人々の窮状を救うことはできません。私たちのような地元のNGOがこの苦境を乗り越えられたのは、ポポフ日本支部が何よりもゴリラと地元の人々との共存に心を砕いてくれた賜です。日本の皆さんに深く感謝したいと思います。私たちポポフは人もゴリラも幸福に共存できる未来を目指しています。それには地元の人々の自覚とそれを支える世界の人々の手が必要なのです。どうか、これからも暖かく見守っていただきたいと思います。

内線が切り裂いた人々の和

この内戦で最も大きな被害を受けたのは、以前この公園で狩猟採集生活を営んでいたトゥワ人たちでした。彼らは1970年にカフジ・ピエガ国立公園が設立された時、それまで生活していた森を追われ、公園の境界に沿って農耕民の人々が住む土地に居住せざるを得なくなりました。当時のザイル政府はトゥワ人たちに農耕を薦めましたが、彼らは農耕生活になじめず、村人たちといつもトラブルを起こしていました。国立公園や中央科学研究所が観光や研究に補助員としてトゥワ人たちを雇いあげることによって、彼らは得意な分野で職を得て、農耕民たちと共存できるようになったのです。

ところが内戦が勃発すると観光客の足は途絶え、研究所も給料が停止して活動できなくなりました。このため職にあぶれたトゥワ人たちが土地の使用をめぐる村人たちとトラブルを起こすようになったのです。とくに1998年に起こった内戦では公園内が戦場となり、公園境界のトゥワ人の村が戦闘の拠点とされました。このため、トゥワ人たちは双方の勢力に森の案内人として使われることになりました。銃を持った兵士と一緒に何ヶ月も森の中で暮らし、密猟をして兵士に野生動物の肉を提供していたトゥワ人たちもいます。

こうした行動が村人たちの反感をあおる結果となりました。昨年、反政府軍がこの地方を制圧すると、これに反対する勢力は森に逃げ込んで抵抗し、時折村に出没して略奪を繰り返すようになりました。村人たちは、トゥワ人たち

がこの略奪の手引きをしていると疑うようになったのです。このため、多くのトゥワ人たちは内戦前に住んでいた村へもどれなくなり、路頭に迷うことになりました。

この事態を放置しておけば、トゥワ人たちは公園内の森に住みつき、野生動物を狩り尽くしてしまうでしょう。中には本当にゲリラと手を組んで村を襲いにくる者が出てこないとも限りません。そこで、ポポフはトゥワ人たちと村人たちを仲裁し、両者が共存できるように取りはからうことにしました。これにはバサボセさんとピチブ・ムフンブーカさんが奔走しました。4月の26日に公園東部の4つの村の村長とそれを統括する地方長官が集まり、バサボセさんたちが公園長と研究所長の親書を読み上げて、今後ともトゥワ人たちの協力が不可欠なので村に居住させてほしい旨を要望しました。ポポフからは調停費用として一時金が支払われ、今後政治情勢が好転して観光や研究協力が復活すれば村にもその利益が還元されることを約束しました。その結果、これらの4つの村では今まで通りトゥワ人たちが居住できるようになったのです。

国境が閉鎖され、物資の流通が止まっている昨今、人々が一番困っているのは薬の入手です。何ヶ月も給料が支払われず現金収入がないので、たとえ薬があっても手に入れるのは至難の業です。最近では昔のように伝統的な生薬に頼る人が増えてきました。こういった薬草は人家のそばでは見つかりません。どうしても公園の中に入って森から取ってくるしかないので、そのありかを最もよく知っているのはトゥワ人たちです。薬草の採集は公園でも大目に見られています。トゥワ人たちがこの知識と技術を利用して村人たちに協力すれば、きっと仲良く共存できるでしょう。ポポフはそれを奨励していくつもりです。





ゴリラたちの現状と保護対策

山極寿一

昨年吹き荒れたすさまじい密猟の嵐はひとまず静まったとは言え、まだ公園周辺の市場では野生動物の肉が販売されています。公園のパトロールはわずか20%の地域しか行われていないのですから、監視の目が届かない広い地域でまだ盛んに密猟が行われていると言っていいでしょう。ひょっとするともうゴリラは密猟者に気づかれにくいくらい少なくなってしまうのかもしれないかもしれません。

私たちが長年調査を続けてきたガニヤムルメ集団は、昨年は虐殺を免れたのですが、今年の2月にとうとう3頭のメスが犠牲になりました。反政府軍がこの地方を制圧した後も公園内には対抗勢力が相当数隠れていると言われてきましたが、こういった人々に森に詳しい猟人が加わって密猟が行われるのです。これまで、私たちのチームは以前公園の森に住んでいたかつての猟人たちといっしょに調査をしてきました。そのため、他の地域に住む猟人たちは私たちに気兼ねしてあまり調査地に侵入しないようにしてきたのです。今回の事件は、この猟人同士の暗黙の掟が破られたことを示唆しています。

3頭のメスゴリラが銃で撃たれた翌日、トラックの一人が密猟者たちに捕まり、2日間彼らの元に監禁される事件が起きました。彼は密猟者たちを説得し、自力で帰って

きましたが、今まで見たこともない人々だったそうです。きっとずいぶん遠くから猟をしにやってきたに違いありません。こういうことが頻繁に起これば、地元の人々が苦労して守ってきた自然の遺産が損なわれ、未来の子孫たちに残すことができなくなります。戦争中だからと言って略奪を許してはおけない。私たちは地元の人々に呼びかけて警戒と協力を促すことにしました。ゴリラを守るには、ゴリラを貴重な遺産とってくれる地元の人々に期待するしかないと思ったからです。

私は3月の末から4月の初めにかけて米国のイェール大学で行われた「戦争と熱帯雨林」というシンポジウムに出席し、カフジのゴリラの現状を報告してきました。このシンポジウムにはアジア、アフリカ、中南米に広がる熱帯雨林で自然保護活動をしている人々がたくさん出席しました。とくに戦争によって被害を被った地域でどんな保護活動が可能か、さまざまな事例を勉強できたことは幸いでした。ここに出席した何人かの研究者と相談して、私たちはこの6月からカフジ・ピエガ国立公園で、ゴリラやゾウなど大型哺乳類の生息数調査を実施することにしました。調査の主力を担うのは、地元コンゴの研究者と地元で保護の活動をしている人たちです。ジョン・カヘークワさん、バサボセ・カニューニさんをはじめポボフのメンバーも多数参加します。これまでゴリラやゾウの密猟をしていた人々も参加してもらいます。そして、これらの貴重な動物たちがいったい今どのくらい生き残っているかを確認してもらうので

ピチブ・ムフンブーカさん

昨年11月にバサボセさんといっしょに来日し、12月には京都の堺町画廊で個展を開いたピチブ・ムフンブーカさんは、1970年代の初めからカフジ・ピエガ国立公園でゴリラ・ツアーのガイドをしてきた方です。1980年代に故郷でお父さんが亡くなり、村長の職を継ぎましたが、コンゴ国内で紛争が起こって故郷にいらなくなり、家族ともどもまた公園の近くへ越してきて今度は研究所の調査補助員を務めるようになりました。この10年ほどバサボセさんや山極さんといっしょにゴリラやチンパンジーの調査をしています。ポポフ日本支部は、ピチブさんの滞在費として10万円を援助しました。

ピチブさんは画を描くのが好きで、これまでにゴリラや野生動物、森や村で暮らす人々の様子をスケッチしてきました。動物のことをよく知っているので、私たちの知らない不思議な風景や動物の行動を描きます。今回は今まで描いたものから何点かを選び、日本へ来てからも描いてもらって個展を開きました。ピチブさんの心の中にあるコンゴの森と人々が独特のタッチで描かれていて、とても楽しく、そして多くの新しいことを考えさせられた展覧会でした。

ピチブさんは外国旅行をするのは今回が初めてで、最初はとても緊張したようです。飛行機の中にトイレがあることに気づかず、6時間半もがまんしていて、空港のセキユ

リティ・チェックを警官の制止を無視して走り抜けトイレに駆け込む一幕もあったそうです。日本では物があふれていて、みんなが不要物として出す服や文房具、電気製品などすべてコンゴへ持ち帰れば役に立つのに、と残念そうに言っていたのが印象的でした。何しろ彼には3人の奥さんと20人を超える子どもたちがいるのです。いつも家族の生活を心配しているピチブさんにとって、使い捨て文化の日本の生活はとてももったいないと思われたようです。あちこちのバザーやバーゲンで家族へのみやげを買い、日本の友達からもたくさんのお土産をもらって、ピチブさんは大量の荷物を抱えてよるめきながら帰途につきました。聞けば荷物の重量超過は60kgだったそうですが、運良く超過料金を大幅に負けてもらったそうです。

日本の寒い冬と車の多い往来はさすがにこたえたようで、コンゴへもどってやっとゆっくり落ち着いて戸外を歩けるという話でした。日本へ来るのはピチブさんの長年の夢でしたが、今回それがかなえられてとても感激しています。日本がどういう国で、日本の人々がどんな人々かよくわかったようです。はたしてそれが来日する前に心に描いていたものとおなじだったかどうか。いつか日本訪問記を画にしてくれることでしょうか。当分、彼のまわりは日本の話で花盛りだそうです。

す。そうすることによって、「まだたくさんいるさ」と思っている人も本当に少なくなってしまうことが実感でき、「守らなければ絶滅してしまう」という危機感をもつことができるでしょう。そしてこの結果を世界へ向けて公表することによって、野生動物と人との共存がいかに困難なものであるかを訴えることができるはずです。地元の人々が立ち上がれば、戦争している兵士だってきっとわかってくれるはずです。

この計画にはいくつかの国際的な保護団体がスポンサーになってくれることになりました。私はさっそく4月の終わりにルワンダへと飛び、ジョンさんやバサボセさん、それにカフジ・ピエガ国立公園の保護管たちにとって詳しい計画を練りました。研究者、ガイド、トラック、監視員たちで構成されるチームを6つ編成し、公園を9つの区画に分けて、くまなく動物の姿や痕跡を見つけて歩くことになりました。これから米国、イギリス、ドイツ、ベルギー、フランスの研究者たちと連絡を取り合って装備を調達し、調査法のトレーニングにとりかかることとなります。科学的な調査を実施するには、さまざまな機器の取り扱い方やデータの記録法などを習得する必要があります。これまでに調査経験のある研究者が地元の人々に交代で調査法を説明しようというのです。私は調査の後半に参加して記録されたデータの分析を行い、報告書づくりに協力することになりました。ポポフ日本支部もこのための協力を少しでも行っていこうと思っています。



学校と博物館

バサボセ・カニユニ

ポポフ・ニュース5号で中央科学研究所の博物館の窮状を訴えさせていただき、日本の皆様からの援助をお願いしました。おかげさまで今回日本支部からポポフに送られた資金の中から1000ドルを使わせていただき、博物館の屋根を修理し、液浸標本を当分の間保持できる薬品を購入することができました。ありがとうございました。

これで博物館の貴重な資料を失わずに保存し、研究所を利用する国内外の研究者たち、未来の世代を担う子どもたちに見学させることができます。標本の中にはもうすでにコンゴでは絶滅してしまったと心配されるコンゴクジャクやまだ新種として記載されていない動植物が多く含まれています。世界の熱帯雨林を代表するコンゴの森林の歴史と構成を理解するために、これらの標本は欠かせないものなのです。今後は少しずつこれらの標本をコンピュータに入力し、データ・ベースを作成していくつもりです。将来この博物館が研究所としてばかりでなく、大学や社会教育の場としても利用できるよう、国立公園とも協力して資料の充実を計っていこうと思っています。

現在、この地方は反政府勢力が支配しているため、現政府の機関である大学や研究所には研究費や給料が支払われていません。教育や研究に従事していたスタッフの多くは職場を離れてしまい、子どもたちは教育を受ける機会をもてません。この危機を打開するために、当研究所では地元からの寄付を募って大学を開講し、学習意欲のある学生を集めて研究所のスタッフが講義をしています。有志が集まって小学校と幼稚園もかろうじて運営しています。武装勢力を恐れて西方の低地から多くの人々が逃げてきているので人が増え、小学校も幼稚園もどんどん膨れ上がっています。

日本で行われた昔話の会に出席した際、コンゴの昔話をしてこういった学校の様子を紹介してもらいました。その時に寄せられた300ドルの寄付をこの幼稚園の文房具を



阿部知曉画

購入する基金にあてました。やっと子どもたちも画を描いたり文字を練習したりすることが出来るようになりました。先生と子どもたちを代表してお礼を述べさせていただきます。

日本では山口県立大でコンゴの森と動物たち、自然保護の現状を講義しました。学生たちがとても熱心に聞いてくれたのが印象的でした。いつか日本の学生たちもコンゴの森を見に来ることができればと思っています。カフジの森は世界に誇る自然の大学です。将来世界の学生たちが学べる場として、さまざまな設備や知識を整えておかなければなりません。将来を担う学生たちの教育も必要です。そのためにぜひとも日本の皆様のご協力をお願いしたいと思います。

今年から山口県立大学の安溪遊地、貴子さんたちを中心に、コンゴ(カフジ)、ケニア(カカメガ)、日本(屋久島)を結ぶエコ・ミュージアムの活動が始まります。ポポフもこれに参加して、人と自然が共存できる未来をつくるために協力の輪を広げていこうと思っています。



ポポフ・グッズの通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売上を現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振込用紙に口座番号：00810-1-90217、加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

ポポフ絵はがきセット(10枚組)	1,000円
ピチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組)	500円
東ローランドゴリラ手刺しワッペン	3,000円
東ローランドゴリラペンダント	2,200円
キーホルダー	2,200円
ポポフ特製ペンダント(新製品)	1,200円

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部人類進化論研究室
山極寿一 気付 ポレポレ基金日本支部

会計報告 1999年5月より2000年4月まで

収入	昨年度よりの繰越金	941,062
	展覧会・シンポジウム 売上	268,915
	作品売り上げ寄付	235,950
	寄付(現金)	178,462
	売上・寄付(郵便振替)	580,900
	ポポフ・グッズ委託販売	33,400
	計	2,238,689
支出	絵はがき制作費	164,755
	ニュースレター制作費	47,000
	ニュースレター、ポポフグッズ送料	79,360
	封筒印刷・製作費(1,000部)	7,500
	ポポフ展準備費、雑費	76,679
	事務雑費	9,408
	ピチブ・ムフンブーカ氏滞在費補助	100,000
	ポポフへ送金	1,334,000
	次年度への繰越金	419,987
	計	2,238,689

近刊案内

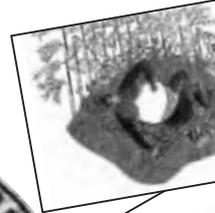
『少年ケニアの友』東京支部編
『アフリカを知る：15人が語るその魅力と多様性』スリーエーネットワーク
岡安直比著
『子育てはゴリラの森で』小学館
山極寿一著
『ジャングルで学んだこと』フレーベル館
高畑由起夫・山極寿一編著
『ニホンザルの自然社会：エコミュージアムとしての屋久島』京都大学学術出版会
安溪遊地・安溪貴子
『島からのことづて：琉球弧聞き書きの旅』葦書房



ペンダント(新製品)



ピチブ・ムフンブーカ
新絵はがきセット(5枚組)



手刺しワッペン

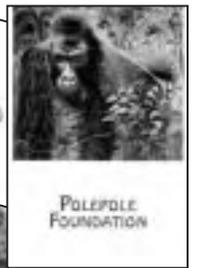


Aタイプ



Bタイプ

ペンダント
キーホルダー



ポポフ絵はがきセット
(10枚組)

「ゴリラとさいらの世界」
—あべ弘士とゴリラの世界—

5月23日(火)〜6月4日(日) (月曜休)

●主催/ポレポレ基金(POPOF)日本支部
▼絵本「ゴリラとさいらの世界」の原画とあべ弘士さんがアフリカで描いた新作の絵も展示します。



「ゴリラとさいらの夕べ」
■5月23日(火) 17:00〜

■コンゴ民主共和国の東ローランド
ゴリラの現状報告
ポレポレ基金日本支部 山極寿一
■動物たちのおはなし あべ弘士
☆参加費/1000円(のみもの付)



あべ弘士 1948年、北海道生まれ。1972年から25年間、旭川市旭山動物園飼育係として勤務。哲学をゴリラに、絵をゾウに揮する。おもな作品に『旭山動物園日記』『あらしのよるに』『バナナをかぶって』etc.
堺町西席 11:00AM〜7:00PM 月曜休み
京都市中京区堺町通御池地下 Tel.075-221-5370

むかしむかし、おんどりとねこは仲の良い友だちでした。おんどりはいもが大好きでしたが、おんどりのおかみさんは料理が下手だったので、いつもいつも、焦げつきたいもばかり食べさせられていました。ある日、おんどりが焦げたいもを食べていると、ねこがやって来ました。「おやおや、何てひどいもを食べているんだい。ぼくの家へ来てごらん、ほっぺが落ちそうないもの料理をごちそうしてあげるよ」

おんどりは喜んで、さっそくねこの家を訪ねることにしました。ねこの家を訪ねる日になると、おんどりは一番いい服を着て、おめかしして出かけて行きました。ねこの家では、ねこがかまどに鍋をかけて、いもをに煮ていました。コンゴの小さな家では、ふつう同じ部屋の中に、かまどとベッドがあります。ねこは煮えている鍋にふたをすくと、近くにあるベッドの下にかくれてしまいました。約束の時間になり、おんどりがやって来ました。コンコンコンと戸をたたきましたが、返事はありません。もう一度たたきましたが、誰も出てきません。おんどりは、おめかした服のほこりをはらい、ねこの家の前に立っていました。でも、いくら待ってもねこは出てきませんでした。おんどりは、約束の日を間違えたかと心配になって来ました。ねこの家の戸を開けて中をのぞいてみますと、かまどで鍋が煮たっていました。

「ねこさん、ねこさん」おんどりが呼んでも返事はありません。煮たっている鍋のふたを少し開けてみると、中ではいもがおいしそうに煮えていました。「どうやら、約束の日を間違えたのではなさそうだ」おんどりはまた戸口に立って、ねこを待ちました。しばらくすると、ねこが戸を開けて出てきました。「やあやあ、おんどりくん、いらっしやい」ねこが手を差し出すと、おんどりはびっくりして言いました。

「ねこさん、どこから出てきたんだい。さっき家の中を見たけれど、誰もいなかったじゃないかい」

「いやいや、ちょっと鍋の中にいたもんでね」

「なんだって、鍋の中ではいもが煮えていたじゃないか」

「そうなんだ、鍋の中に入るのがいも料理のこつなんだよ。さあ、おいしいいもを食べよう」ねこはおんどりに、うまく煮上がったおいしいいもをごちそうしました。

「うん、これはうまい。こげてもないし、どうすればこんなにうまく料理できるんだろう」おんどりは感心して、ねこに聞きました。



「それはだね、おんどりくん。ぼくが鍋の底に入っていたからだよ。だからいもがこげつかないのさ」

「なるほど、なるほど。でも鍋の中はとても熱いだろう」

「まあ熱いけどね、死ぬほどのことはないさ」

「そうか、そうか。さっそくぼくもやってみよう。たしかに鍋の底に入れば、いもはこげないなあ」おんどりは喜んで、帰って行きました。家に着くと、おかみさんと呼んで言いました。

「おいしくいもを煮るこつを教えてください、おれの言ったとおりにするんだ」

おんどりは、大きな鍋を用意して、おかみさんにいもを洗うように言いました。おかみさんがいもをきれいに洗うと、いもを鍋に入れ、自分はいもの下に入りました。

「あんた、鍋の中に入ったりしてどういうつもりかい」おかみさんは聞きました。

「さあ、鍋にふたをして、ぐらぐら煮てくれ。そうすれば、とってもおいしいもが煮えるんだ」おんどりは自信たっぷりに言いましたが、ねこに教えてもらったとは言いませんでした。

「なにを言ってるんだい。鍋を煮たりしたら、おまえさんは死んでしまうじゃないかい」おかみさんは、おんどりの言うことには全く取り合いませんでした。

「はやく火をつけるんだ。死ぬような事はないからだいじょうぶだ」

「だめだめ」おかみさんは火をつけようとしますが、でも、おんどりがあまりにも自信たっぷりに、だいじょうぶだと言うものですから、とうとうおかみさんは、鍋を火にかけました。ぐらぐらと鍋が煮立ちました。いもがとてもおいしそうに煮えました。おかみさんが鍋のふたを開けてみると、おんどりは鍋の中で死んでいました。おんどりが鍋の中で死んだというニュースは、あっという間に村中に

広がって行きました。ねこも聞きつけて、おんどりの家にやってきました。泣いているおかみさんや子どもたちに、ねこはねこなで声で言いました。

「奥さん、大変なことでしたね。おんどりくんとは、とてもとても仲が良かったんですよ。仲良しのおんどりくんの埋葬は、ぜひぜひ私にまかせてくださいな」ねこはそう言うと、おんどりの亡きがらを、運んで行きました。そして、ねこはどうしたかって、もちろんおんどりを食べてしまいました。村のどうぶつたちは、おかみさんがねこにおんどりの埋葬をたのんだと聞くと、「ばかだねえ、ねこがちゃんと埋葬するわけがないじゃないか。きつと食べてしまったよ」と言いました。しばらくして、また、ねこがおんどりの家にやって来ました。

「やあやあ、こんにちは。みなさんごきげんはいかがかね」ねこが入ってくると、おんどりの子どもたちが迎えました。

「おかあさんはどこだい」ねこは、おんどりのおかみさんも食べてやろうと思っていました。

「おかあさんは、あそこです」子どもたちが指さす方を見ると、なんとそこには、頭のないおんどりのおかみさんがいました。「おいおい、おかあさんの頭はどうしたんだい」ねこは驚いて聞きました。

「おかあさんの頭は畑にいます。頭を切って畑に置いておくと、頭が虫を食べてくれるんですよ」

「ええっ、頭だけが虫を食べているって。でも切ってしまった頭はどうなるんだ」

「頭なら心配いりません。またすぐくっつきますから」ねこはなるほどと思いました。頭のないおかみさんも元気そうです。ねこは家に帰るとすぐ、自分のおかみさんと呼んで言いました。

「おい、いますぐおれの頭を切り落としてくれ。そして畑に来る鳥を捕まえるんだ」

「おやまあ、頭を切り落としたりしたら、死んでしまうじゃないかい」ねこのおかみさんは、まったく取り合いませんでした。

「そうじゃないんだ、頭は切ってもまったくくっつき、畑の鳥を捕れるんだぜ。さあ早く、切ってくれ」ねこがあまりにも強く言うものですから、とうとうねこのおかみさんは、ねこの頭を切り落としてしまいました。でも、頭はもう二度と体にくっつくことはありませんでした。みなさんは、にわとりが寝るときに、頭を羽の中に入れてしまうのを知っていますか。そのときは、まるで頭がないように見えるのです。おんどりのおかみさんと子どもたちは、こうしてねこに仕返しをしたのでした。

訳／絵：伏原のじこ